

とりとめない折木奉太郎と千反田えるの恋物語

川瀨泉一郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

＜古典部＞シリーズ&TVアニメ『氷菓』の二次創作。

主に古典部員たちの2年生の秋～冬にかけてのエピソードです。

基本的に一話完結型です。最初は前後編で行きますが。

目次

折木奉太郎は千反田えるに告白したい。前編	1
折木奉太郎は千反田えるに告白したい。後編	4

折木奉太郎は千反田えるに告白したい。 前編

サンタクローズをいつまで信じていたかなんてことは他愛もない世間話にもならないくらいのもいいような話だが、それでも俺がいつまでサンタなどという想像上の赤服ジーさんを信じていたかと言うとこれは確信をもって言えるが最初から信じてなどいなかった。

どこかの某有名小説の冒頭部分の一節を思い返してみたが、確かに最初から信じてなどいなかった。俺はもともと冷血漢なほうなのか、それとも人間として当たり前の事なのか。そこまで考えようとは思わない。俺は『省エネ主義』を強く主張するからだ。別にサンタのことなどどうでもいい。やらなくてもいいことならやらない。やるべきことは手短かに。だ。

里志曰く、俺は灰色を好む奴に見えるらしい。俺は人を色で一括りにする風潮に異を唱えたい。そもそも人間と言うのは色で表すほど浅はかなものではないのだ。高校生活と言えば薔薇色、薔薇色といえば高校生活。薔薇色とはどんな色だ。薔薇は多色多彩である。その中のどれを指すのかぜひ教えてほしいもんだ。

放課後の地学準備室で千反田に対してひとくさり語ると、千反田は薄く微笑みを浮かべながら言った。

「薔薇色ですか？たしか赤い色を指す言葉だった気がしますが」

そうか赤色か。赤色だったのか。俺は言った。

「ところで里志と伊原は？」

千反田が言う。

「福部さんは総務委員の仕事で今日は来ません。摩耶花さんは用事があるそうです」

つまりもう誰も来ないという事だ。俺は言った。

「なあ千反田。嫌じゃなければいいんだが、一緒に本屋にでも行かないか？」

秋晴れというべきなのか残暑晴れと言うべきなのだろうか。澄み切った青い空を眺め、俺はそんなことを千反田に言った。千反田はま

た微笑みながら言う。

「残暑晴れ？ですか？あまり聞かない言葉ですね」

俺は言った。

「そんな言葉があるかどうかも知らん」

そんなことを話しているうちに本屋に着いた。神山市内でもそれなりに有名ならしい光文堂書店である。それなりの品揃え。それなりに広い店舗。まあ外観は昔からある本屋と言う感じだ。中に入ると、ある程度の客入りを想定しているのか冷房が効きすぎていて少し寒いくらいである。入口を入れるや否や、千反田はどこかのコーナーに行ってしまった。俺は時折買ったりする“ライトノベル”のあるコーナーに入る。ソードアートオンラインだとかとある魔術の禁書目録だとか俺の妹がこんなに可愛いわけがないだとか長文タイトル責めが来てすこしくラクラクするところだが、たまに面白そうな小説がある。例えるなら涼宮ハ○ヒシリーズだとか境界の彼方だとか中二病でも恋がしたい！とかだ。それらは買って読んでしまっただし、ライトノベルがかなりいいのは重々承知している。あまり詳しくないが読んでいる作品はいくつかある、という感じである。俺は魔法科高校の劣等生というかなり人気らしいシリーズを買おうか迷っている。

「折木さん。それはなんですか？」

千反田がいつのまにか後ろにいた。俺は言った。

「ライトノベルというやつだ」

千反田が言う。

「ライトノベルって何ですか？」

俺は言った。

「一般文芸小説とは違い、読書が苦手な奴でも楽しく読める・・・みたいな感じだと思う」

それで間違っただけやいいが。千反田が言う。

「それは素晴らしいですねっ。私も買いますー！」

・・・買うのか。

その後、伊原から『ちーちゃんにラブ進めたのあんた？』と聞か

れたのは言うまでもない事である。

折木奉太郎は千反田えるに告白したい。後編

唐突だが、俺は千反田えるに恋をしている。生き雛祭りるときからだ。何故かはわからない。1年のころには惚れていて、あるとき自覚したのかもしれない。よくわからないが現状、俺は千反田えるに惚れている。

一緒に書店に行ったあとも当然何も変わるわけでもなく、いつも通り放課後部室に行き、雑談したりと普通に過ごした。文集の俺の担当分はすでに終了しているため、何もすることがないのだ。伊原と里志は備品のパソコンとにらめっこしてあーでもないこーでもない騒いでいた。千反田は俺が勧めた（というかいつの間にか買っていた）ラノベを楽しそうに読んでいる。それにしてもなんでそれなんだ？なんで『サクラダリセット』なんだ？まあべつに気にすることではないか。

今年の文化祭は特にトラブルもなく終わった。まああつたといえどあつたのだが、それはまた別の話である。総務委員の仕事があるから先に行つてと里志が抜け、それを待つからと伊原が抜け、残ったのは俺と千反田。今から千反田邸で古典部の打ち上げなのだ。陣出まで、二人並んで歩く。俺は言った。

「千反田。ちよつといいか？」

周囲には誰もいない。千反田が言う。

「実は私も折木さんに話があります」

俺は言った。

「同時に言うか？」

千反田が言う。

「では行きましょう」

いつせーので。

「俺はお前が好きだ」

「私、折木さんが好きです」

同時に言つて同時に互いの顔を見た。俺は言った。

「なっ・・・そうなのか？」

千反田が言う。

「そうだったんですか」

俺は言った。

「じゃあ、付き合うか!!」

千反田の表情が驚きから喜びに変わる。初恋は実らないと聞いたことがあるが全くそんなことはなかったと知った日だった。

「おや?二人ともずいぶん嬉しそうじゃないかい。何か良いことでもあったかい?」

里志がそう言う。そんなに顔に出てるかね。千反田は俺でも分かるほどに喜色が表情にまわっている。だが俺はそこまで表情には出ていないはずだ。千反田が言う。

「ふふふ。そう見えますか?」

見たまんまそう見えるよ。十人中十人が『何か嬉しいことでもあったの?』て聞くに違いない。現に伊原が言った。

「なんかいいことあったでしょ?」

千反田が言う。

「まあ、はい」

打ち上げはそれなりに盛り上がり、結局千反田邸に泊まっていくことになった。千反田が自室に入り、俺たちは千反田の言葉に甘えて一人一室ずつ使わせてもらった。俺はすぐに寝たが、隣の部屋ではなにかやっていたようだ。何かまでは知らないがな。

何があったわけでもなく、朝食までご馳走になって俺は自宅に帰った。リビングに足を踏み入れるや否や、

「おかえり。奉太郎。あんた彼女できたんだって?」

朝っぱらからご挨拶である。血を分けた姉貴とは思えんな。俺は言った。

「まあな」

何故知っていると聞くべきなのだろうが、大方里志あたりから聞いたのだろう。姉貴が言う。

「いやー。まさかあんたに彼女ができるなんてね。意外意外」

甚だ失礼である。俺が恋愛に全く興味がないとも思ったか。

思ってたんでしょね。ええ。
その後何度かデートを重ね、大学卒業後、俺とえるは死ぬまで結ばれた。